



また、浪人しちゃいました

カフェソシ店主 平野 和弘
元 東洋大学教授



すべての時間を自分で思うように 使うことができる解放感

三度目の浪人生活を送っています。最初の浪人生活は言わずと知れた受験浪人。一年浪人して大学に進学したのですが、浪人中はいわゆる「宅浪」として過ごしました。当時一浪は「ひとなみ」と言われており、同期の人たちの少なからぬ部分が浪人しましたが、ほとんどの人たちは予備校に入っており、宅浪するというとひどく驚かれました。

しかし、私自身は、不安もありましたが、むしろ「やっと学校や授業から解放される」という解放感にわくわくしていた気がします。ラジオ講座と通信添削を目安にしながら、その時々自分の時間のすべてを自分が必要だと思うことに使うことができ、自分なりに充実した一年間でした。受験勉強の予定さえ済ませれば、後は読みたい本を読んで「ほんとうの」勉強ができる、と自分を鼓舞していたことを憶えています。

私の学校生活は、幸いなことに、友達とわいわい楽しく過ごす平和なものだったのですが、中学に入って予習をすることを覚えた頃から、授業を受ける時間というものが、薄っぺらい教科書を1年もかけて重箱の隅をつつくようにくどくど解説するだけの、ひどく退屈なものに思えて、ぼーっとして過ごすことが多くなりました。学校に通う時間を読みたい本を読むのに使えたらという思いが強くなると、仮病を使って二、三日ずる休みしたりもしました。

どこにも所属せずにすべての自分の時間を自

分で思うように使うことができる解放感を、社会に出る前に体験してしまったことは、その後の私の人生に、良くも悪くも、少なからぬ影響を及ぼすことになったようです。私は、定年を待たずに大学を去ってまったく畑違いなことを始めてしまったわけですが、決断するにあたって直接そんなふうを意識してはいませんでした。もしそういう経験をしていなかったならば、最後の一步を踏み出せなかったような気もしますし、そもそも大学を辞めてしまおうなどと本気で考えるような人間にはならなかったかもしれません。

長すぎた就活浪人期

二度目は、大学院を単位取得退学してから常勤のポストに就くまでの長期に渡る就職浪人の時代です。「いい学校、いい会社」という受験競争の延長のような就職活動に強い違和感を持っていた私は、自分の研究に専念してさえいれば自由そうに見えた先生たちをロールモデルとして研究者の道を歩み始めました。けれども大学のポストを得るための就職活動にもあまり熱心になれず、貧乏ではあっても気楽な非常勤講師生活を思いの他長く続けることになってしまったのは、大学浪人中に経験した解放感の延長線上で大学生活を送ってしまったことも影響しているかもしれません。私の場合は、社会に出ていくための移行期としては、この時代が長すぎました。

移行期としての若者期の長期化という問題が、いわゆる先進国と呼ばれる国々共通の問題として注目されるようになったのは、工業社会

industrial society から脱工業化社会 post-industrial society への転換が進行した 70 年代後半くらいから 80 年代にかけてです。製造業の生産過程における単純労働の自動化や、人件費コストを抑えるための海外進出などによって第二次産業人口は減少に転じ、変わって情報・通信・運輸・流通などの第三次産業に携わる人々が多数を占めるようになっていくという産業構造の転換は、若者たちに進路選択における世代間継承の困難を強いることとなり、若者の高い失業率と「学校から職業への移行」期間の長期化は、欧米諸国共通の社会問題となっていました。

同じ時期、日本においても同様の転換が進行していたわけですが、高度成長の時代に確立した新卒一括採用システムのもとで若者の失業問題はただちに表面化することはなく、問題が顕在化してくるのは、バブル崩壊を機に新自由主義的政策が本格的に導入された 90 年代になってからのように見えます。しかし仔細に見てみると、70 年代後半受験競争の激化に伴って教育産業が急成長し、日本の子どもたちの塾や予備校通いが常態化していったこと、76 年の専修学校の法制化により長期就学が大衆化していくなかで高卒就職者がマイノリティー化していったこと、80 年代の日本の学校が、校内暴力に始まり、管理教育、いじめ問題、不登校…と、急速に閉塞感を高めていったことなどを鑑みると、学校制度の内側に矛盾を封じ込めることで問題の顕在化を先送りしていただけであることが見えてきます。

ルールを外れることを許さない 社会心理

高度成長期の日本の歴史的社会的条件が生み出した日本独特の新卒一括採用という慣行にも功罪両面があることは言うまでもありませんが、それが日本人のメンタリティー、とりわけ子育てをする親たちのそれに与えてきた、今も与え続けている影響は多大なものと言わざるをえません。ルールを外れることを自他に許さな

い社会心理が社会生活の様々な局面で支配的であり、それが子どもの教育に対する姿勢への強烈なバイアスとして作用していることは否めません。

私が、還暦を機に今度は自分の意思で選択して、人生三度目の浪人生活を始めたのは、公私にわたって心身の疲労の限界を感じたからで、ルールから外れること自体を意図したわけではありません。むしろ長すぎた移行期の後遺症という面があるかもしれません。

区切りのない人生

この原稿の執筆中に、「一年以内に辞める若者」が続々生まれるワケ」（東洋経済 ONLINE 4/2(月) 6:00 配信）という記事が目にとまりました。「(学生時代の)就活のやり直しともいえる転職市場=第二新卒市場が醸成されている」ので、「見切りをつけ」やすくなっているようです。若者をめぐる全体状況の厳しさを忘れるわけにはいきませんが、選び直しが転落と同義と見なされていた日本社会においても、試行錯誤しながらキャリア形成していく移行期としての若者期を生きることが、以前に比べて現実的な選択肢となってきたという意味では、必ずしもネガティブな現象ではないと思います。ただ、移行期の先にあるはずの安定した成人期の不透明感が高まっているので、移行期と成人期というカテゴリー自体、再構築する必要がありそうです。

